都市共同体 特集

バスでさらに二〇分ほど北西の方角に入った

小田急線の本厚木駅から半原

か上萩野行

ところに、厚木振出塾はある。地理的には丹

山地の東の端にそれほど遠くなく、ここか

道端の《みんなおいで振出塾》というユー からすぐにわきに入っている道があり、

その

らは丹沢の山々をのぞむこともできる。

久保

そこ

小さな停留所でバスを下りると、



みだしてい

くの

かもしれない。

次から次へと実験的なコミューンの試みを生

ならない

0)

だが、

原さんのこのような方法は

始めるかもしれない。新らしい場所はこの道 の地点で彼らの新らしいコミューンづくりを プに別れて何ヵ所かに散っていき、それぞれ

をさらに一歩つきすすんだところになければ



原さんは、

形成の過程の表現として位置づけられている て共同体のなかで生きつづけている彼の理念

報告/上野允士

く滞在してい

る若者たちもいくつかのグル

にとりかかろうとしている。ここに比較的長

塾をたたんで他の場所で新らしい試み

今年中か長くとも来年いっぱ

に

ばらになり、 ら家の密集した町中をしばらく走りつづけ ラスな道標がすぐに目に入る。バスは駅前か このあたりまで来ると家の数も比較的ま 畑の空間が多く目につく 3

共同生活を行なっている。 借りきって、ここで二〇名に近い若者たちが とつが振出塾である。大きな古 に数軒の農家に行き当たるが、そのうちのひ この道標に従って一〇〇米も行けば、 い農家を一軒 すぐ

後の人数ならば、この大きな農家のなかでか ろにある天井裏の二階も含めれば、二〇人前 うな手すりもない古い階段をよじ登ったとこ 同生活に便利なようにといって特に工夫をこ ろよりはずっと汚ない。内部の諸設備も、共 て、多分、この家の持ち主が生活していたこ んら変わりがない。家のなかは雑然としてい なりゆったりとしたスペ らした様子もなく、 るが、 玄関には『厚木振出塾』の看板が 明治時代からそのまま残っているかのよ 外から見る限りは、普通の農家とな 昔風のまま使用されてい ースで生活すること かかって

康男氏を中心に一 ばくがここを訪れたときには、創設者の原 七名の若者 (平均年齡二一

> 者もわずか数日前にやってきた者も混ってい ていたが、そのなかには一〇ヵ月前からいる オーニニオ、うち女性四名)が生活を共にし

かり ことを我々は理解できる。「一週間ほど振出 いそうだが、 とのあいだに、だれも正確に数えたことはな 開始されたが、 なものではないようだった。 塾を留守にして、帰ってみたら知らない顔ば 振出塾の人数と顔ぶれの変動がとても激しい しているということだった。このことから、 ここでは、 やった」という嘆きも、まんざら大げさ 去年の四月一日から共同生活が 四〇〇人を越える若者が出入り それ以来わずか一年とちょっ

済的基盤は、 ることも可能である。とにかく、 う規則はない。もし働きたくないというのな の人の自由で、 で現場まで通う。仕事に出かけるか否かはそ 振出塾にはマイクロバスが一台あって、それ の建築工事現場での仕事をあつかっていた。 顔を出したときには、鎌倉と海老名の二カ所 仕事を請け負う形で行なわれている。ぼくが ここでの労働は、外部での建築現場等での 金になることをなんにもせずにここに この土方労働によっ 特に出なければならないとい 振出塾の経 て支えら

> は変わりないし、ここへやってくる者はだれ ずに一括して支払われ、それをもとにして食 も豊かな生活をしに来るのではないのだから 活は貧しくなるが、平均してここの生活がな 費を始めとする必要経費に使われる。 かもしれない。 そんなことはたいして重要な問題ではない んとかやっていける程度のものであることに ぶらぶらしている連中が多ければぞれだけ生 いる。 仕事から得た賃金は個人が受け取ら だから、

のメンバ といった方が近い。 ではなく、何人かの人が趣味的に育てて かの野菜が作られるそうだが 裏手に小さな畑があって、ここでは何種類 ーの野菜がまかなわれるということ 、それで振出塾 Vi 3

った類のものでは決してないのだ。食事と、 というよりは、むしろ「無規律」といった方 小さな五右衛門風呂で入浴をすませてしまえ しいが、それとて、守らなければならぬとい ーティングが開かれたり、規則めいたもの が実情にぴったりしている。必要に応じてミ (写真参照)が作られたりすることもあるら ここでの生活の様子は、いっさいが あとは各人好きなように時間をすごす。 ージャンを囲む者、 「自由 -11-

創設者の原康男氏にとっ

塾という実験的な要素を多分にも

たコミュ

ぐり込む者などである。 ギターを弾く者、 自分の好きなところに塒をみつけて眠れ ボケッとしてタバコをふかす者 さっそくふとんのなかへも 寝る場所も各人自由

間はすべて受け入れられ、 自由さも徹底していて、ここで生活したい人 ようと一年間とどまろうと本人の好きなよう 来るのも自由、 出るの も自由だとい 三日でおさらばし うそ

うに記している。 こうした雰囲気を振出塾の原康男氏は次

> 集まって、十四、五名が生活をしてい や坊主と手におえない の強い(あくの強いとも 娘が つの る。 間 にか

多すぎる、 うも子供達に自分の方が教わっていることが るようになった。 所の子供達が勉強というより遊びに週二回来 出塾〉にしてしまった。K氏夫妻の世話で近 いのだろう。そこで彼らは〈みんなおいで振 私たちで書いているので、 振出塾の名称にしても、 謝礼の話が出て来たが、皆で考えてへど だから自分達が子供達に月謝を出 親たちから御礼をい 何かピッタリこな 彼らの集まる前に b n た

AMG:30起床 洗顔、小とんあげ 6:30 ラジオ体操 P.M 12:00届

か? 考え方である。 たちというのが、原氏を始めにしてここでの いちばん備えているのは他に行き場のない者 こうとしてはいけない。振出塾へ行く資格を で、あるいはここになにかを〈期待して〉行 いいのだが、振出塾の住人たちが言っていた 振出塾の雰囲気を伝えることができただろう ントでも張ると、集会にはことかかない。」 で誰が来ても寝れるだろう。庭も広いのでテ 名は生活している。だがまだ収容力はあるの のが常時一五、六人居るし、多い時には二〇 より多い位の人が来ている。二人で出発した ように、なにかを〈見に行く〉というつもり 以上のようなラフなスケッチと写真とで、 興味のある人は実際に行ってみるの

が

少し考えてみたいと思う。 それでは別な面から、 振出塾の特質をもう

会」の常連の一人でもあり、 厚木振出塾の創設者で、 「共同体話合い 時々協会の事務

精通した人のひとり は日本的な共同体の性格に内側からもっとも それぞれ数年づつかけてまわった、おそらく 陽花邑とい 来るまでのあいだ山岸会、心境農産、 へも遊びに来てくれる原康男氏は、 0 た関西にある代表的な共同体を といえるだろう。 大倭紫 厚木に

いるし、

いる。だが実際に働いている住人達は、そん

外部の人たちが色々と作ってく

れて

る彼の、 ることができる。 振出塾は、コミューン志向の道を歩んでい その延長線上の一表現としてとらえ

践する一個の小社会として独立したものであ それ自体が生産手段を備え、 や山岸会、アメリカの宗教的共同体のように 浮かべるのは、 〈共同体〉とい 例えばキブツだとか、一燈園 って、我々がふつうに 独自の論理を実 頭に

と書いているが 素が少ない ての振出塾は、 性格は大いにそなえているが、 原氏は以前の『月刊キブツ』に「塾として ミューンと呼んでみても、コミューンとし ればはなはだ不十分なものにすぎない これらを念頭において厚木振出塾を我 ので、 従来のコミュー このような比較にはほとん ガッ 今までの共同体としてのイ して帰る人も多い ンの定義から 生産体の要 々が

えるだろう。

て類

「振出塾の

意義や目的

を皆が知り

たが

0

111 実体を知る資料はないけれども、こうしたコ システムなり雰囲気があるという。 ューンのなかには短期間に泡のように消えて るが、その数二〇〇〇ともいわれる群小コミ 独自の倫理観なり思想なりを備えたものもあ 等の生産力を持ち、かなり大規模でそれぞれ ヒル、トウインオ 新らしいコミューンのなかには、サンライズ 方に眼をむけるべきなのである。アメリカの 流行さえ生みだしたアメリカのコミュー 型を求めるならば、 トした若者たちの手によって作られひとつの くものが無数にあるのだという。これ ンのなかにこそ振出塾とかなり共通 ークス、モーニングスター ヒッピ ーやドロップアウ らの ンの 0

ない 的な比較論的な見地からこのような見方で見 ひとつの 究の対象にはならない たいくつかの点に関してであるべきであって だから、 住人たちも自分たちを自ら規定して、統 ーンを研究しようとする人にはほとんど研 実情が明らかにされるの のである。原氏は書いている まとまりをもった社会としてのコミ 厚木振出塾のような小コミュー うようなことはまるで考えてい だろう。勿論、 はきわ めて限ら 振出塾 n

体に最初から入っていけない人を作るし、 本こ最切から入っていけない人を作るし、又りの中に目標をかかげることは、そのこと自 た意見がでて、無限の方向から観ることがで なことに無頓着で、それぞれ れ以上の特別な意義付けには意味がない 労働をしているだけのことなのであって、そ らないように、ただいちばん手近にある肉体 もが生活をしていくためには働かなければな むけられてきているが、ここ振出塾ではだれ し、これまでにも多くの研究がこれらの点に の観点から独立した考察の対象となっている や個人の能力と労働調整の関係等、 キブツのような社会ならばそこでの労働哲学 修養団体でもない。」 きるようである。この様に移動性の強い集ま とはない。いうなら多色彩で多いほど変わっ もってきて、意見の統一を今だにはかったこ たとえば、〈労働〉ひとつをとってみても の思い、 考えを くつか

振出塾に来る若者たちの 自立してやっていかなければならない以上、 とつの生活体として経済的にもある線まで ただ、このような形を維持し、なおかつひ 誰 一へ来たそ

える。

たと思っていると、次の日には同じか、それ

一度に三、四人旅に出ていって静かになっ

そう〉なんて話がでる。

苦痛にも耐えていく必要があるのかもしれな のは苦痛でしょうね」と原さんは言ったが、 条件の射程内で選ばれる。「彼らが毎日働く せず、だれにでもできる土方仕事が必要最低 ら必然的に金になってしかも特殊な技能を要 の仕事が用意されている必要がある。そこか の翌日からすぐに労働に参加できるような質 (はみだし者の空間) 振出塾においてはこの

ことができる。 かで「共同体とは無能者のためのもの」と言 たけれど、彼の共同体に対する基本的な理 、この八方破れの振出塾のなかでもみる はいつかの 「共同体話合いの会」のな

うえを走るのは耐えられない奴、 ない奴、この社会のうえに敷かれたレールの はなく振出塾の若者たちはここを、なにもす とも条件を問われることもない。原氏だけで と全く本人の自由であり、資格を問われるこ れでも受け容れる。いつ来ていつ出ていこう ないという形で表現されている。 があるという考えは、来る者いっさいを拒ま まず最初のこの 奴、なにをしたらいいのか分ら 〈無能者のため〉に共同体 あるいはレ 振出塾はだ

> るようだが、このような認識のうえに立って くは覚えている。地獄の底にしては上品すぎ かが「ここは地獄の底だよ」と言ったのをぼ うとしても受け入れてもらえない奴 るだろう。 ため〉という発想の生きた表現であるといえ 現代的な特徴であるといえるし、 コミューンが位置づけられることはきわめて った人間のための場所だと言うのだ。 ルのうえを走っている列車にのせてもらお 〈無能者の だれ そう

側に囲 結びついて、 できる場所でなくてはならぬ」という意識と 具体的な一定の目標をかかげてしまえば、そ ってはいけないという考え方がある。 がここへやって来ることの目的を定めてしま られていることだが、「だれでも来ることの な色彩をもった人間がいっしょに仲良く生活 の求めるところの共同体ではない。 もった人によって構成された共同体は、原氏 な考え、同じような能力、 るところの無意識の連帯感でもって自らの外 し、原氏がなくさなければならないと主張す れに賛同した人しか来ることができなくなる それから、 いをしてしまうことになる。同じよう 先程引用した原氏の文章で述べ 振出塾に立派な意義だとか、 同じような志向を 彼は別々 もしも

> 出したいと思っているのだ。 していくことのできるような空間をこそ創り

> > -14-

律」を生みだしていかざるをえない。原さん 則を定めたりしてそれに従っていこうとする なって世話をしているが、 評価している様子だった。 に人の手に頼らずに自覚的に自分の内に「規 することもできるけれども、まさにそのため れた規律のなにもないところでは、人は何を のような規律もないという点である。強制さ ら規定されたような守らなければならないど あると原氏は言う。それは、ここには外側か ような動きはない。振出塾は見た目も貧し 第に安定した方向へむかっていく過程を高く がいくつかの試行錯誤をくりかえしながら次 ここでは年配の原さんが一応全体の中心に 初めて振出塾へ飛びこんできた若者たち 立派な農場も施設も持ってはいないけれ 山岸会や一燈園よりも優れた点がひとつ 組織を作ったり規

できるだろう。彼らは《なにかすることを見 と思ってくるな」ということばの意味も理解 つけたらここを出ていけ〉というのだが、 こういうことになってくれば、「振出塾へ 期待してくるな。なにかがここにある

8ページへつづく

か わ らず やろう

「ワークキャンプを考える会」報告

ゆく必要があろう。 分たちの「力」を発揮できる条件を用意して しでも開かれた生きた関係をつくり けがましい関係が支配している世の中で、 てゆくことではないか。この閉鎖的で押 確認し合えるような輪をあちこちに創り出し た生き方や活動をしながらも似たような方向 向かっている者同士が、「なかま」として 大切なことの一つは、さまざまな異っ 出 し、自 しつ 小

食事をともにするなかで、 活動を続けている三十数人の若者たちが集ま この会合には、各地でワークキャンプなどの 回ワークキャンプを考える会」も、 金峰開拓のSCIセンターで開かれた「第二 お互いがつながり出したのを感じた。この会 人かの「言い出しっぺ」によって企画された 「輪」をつくり出すのに役立ったようだ。 四月二二~二三日に山梨県のはるか山奥の の心を開いて語り合い、 目に見えない糸で 見つめ、 そうした 何

> S C I る人たち、金峰開拓などだった。 IWCの関東と東海と関西の三つの委員会 それに山谷の労働者の解放運動をしてい LBF、日本協同体協会、 備北共同

はなく、 会の中で地位や安楽さを求めて上昇するので会合に参加した大部分の人たちも、現在の社 さぶり変えてゆく力をもつものらしい。この 提供するというワークキャンプという活動は の矛盾にとり組んでゆく生き方を一生懸命に ず、そこに参加する者の生き方や価値観をゆ その地味さや理論的アイマイさにもかかわら 行って一時的共同生活をしつつ無償の労働を 模索していた。 さまざまな矛盾や問題をかかえている場へ 「自己変革」といった言葉が、 をこめられて行き交った。 自分にそくしたやり方でこの世の中 話合いの中で、「共同体」と さまざまな

ないとも 在のワークキャンプ運動は十分に盛りあがら そうした力を持つにかかわらず、 しかし、 この会合で

というのではなく、

ンター 北共同体の試みなど、さまざまである。とく 月刊キブツの前号で紹介された金峰SCIセ 民運動と結びつく形で展開している。その他 なきわめて具体的な形でとりあげ、それを市 屋ではじめている。仙台ワークキャンプでは、 C東海委員会では、ちえ遅れの者のように現 ていることだった。 こえるべく、各地で真剣な模索がおこなわ という構想である。ここには中産階級出の若 の中での農業労働の場をつくり出してゆこう 労働者たちが集団的自力更生をめざして自然 に、新たな可能性を感じさせるのは、 でも通れる横断歩道をつくろう、というよう 身障者という少数者に対する差別を、車椅子 きる「施設共同体」の建設を目ざし、それへ 在差別されている人たちも共に平等に生活 心強かったのは、今までの運動の限界をのり ステップとして自分たちの共同生活を名古 ともあれ、こうした会合を通じて、 運動の限界をこえてゆく何かがある。 の試み、渋川青年の家や交流の家や備 例をあげよう 山谷の FIW 「世の 7

てゆこう」という元気さが出てくればもうけ が重苦しくなってきたから○○できない 「にもかかわらず〇〇し にもかかわらず やろう!

14ページよりつづき

な

という幻想を抱かせるよりは個を尊重したひ なたはここにいればいつまでも幸せですよ、

びきを感じる。

7 狭

んだといおうとも、ここが果してきた役割は 振出塾の住人がここには役割も意義もない

n

やはり「はみだし者のふきだまり場」となる ようなシステムをもち同じような行き方をし ことに徹したことにあるだろう。これと同じ

分にあるし、こういった場の存在を必要とし ようとする試みがいくつも発生する余地は十

向

す

ている若者もたくさんいるのである。